

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 施設花きの高温対策</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○露地花きの湿害対策 ○施設花きの病害・生理障害対策 ○シンテッポウユリの露地栽培管理と収穫 ○シクラメンの施肥管理 ○ハボタンの育苗 ○デルフィニウムのほ場準備 <p>施設栽培では高温障害を受けやすいので、換気扇等を利用した強制換気を実施し、日中の温度上昇を極力抑える。寒冷紗による遮光も効果があり、50～75%遮光を目安とする。遮光資材の展張は施設外や開放した施設内の肩から肩への平張りの効果が高い。展張時間は概ね10時から16時とする。トルコギキョウやばらなどでは、葉や花卉の焼け防止のため必ず遮光すること。</p> <p>かん水は夕方、または朝夕行い、日中の暑い時期のかん水は出来るだけ控える。日中萎れが見られる場合は、細霧または葉水を与える。</p> <p>高温、乾燥時にはハダニ等、害虫の被害が多発する傾向があるため防除を徹底するが、高温時は薬害発生のリスクが高くなり、また身体への負担も過大となるので、朝夕の気温の低い時間帯に行う。</p> <p>作業は出来るだけ朝夕に実施することが望ましいが、日中の作業に際しては、熱中症防止のため、空調服の着衣や早めの休憩、十分な給水等に心掛ける。</p>
<p>(2) シンテッポウユリの栽培管理と収穫</p>	<p>7月中旬頃からは早生系品種の収穫期となる。日中に採花すると花卉に焼け症が発生する可能性があるため、特に晴天時の採花は気温の高くない朝8時頃までに終了する。切り花は、直射日光が当たらないよう収穫クロスなどに包み、できるだけ早く水上げし、調整した</p> <div data-bbox="831 1529 1394 1921" data-label="Image"> </div> <p>写真 収穫間際のシンテッポウユリ</p>

項 目	作 業 内 容
(3) シクラメンの施肥管理	<p>後に冷蔵庫内で保管する。採花の適期は開花4～5日前で、蕾が白味を帯びる前の緑の状態である。</p> <p>なお、シンテッポウユリは他のゆりに比べ生育にばらつきがあり、採花期間が長くなるため、葉枯病の防除を徹底する。</p> <p>7月はシクラメンの花芽形成期であり、植物内の窒素濃度が高すぎると花芽の形成が遅れる原因となる。このため7月下旬より液肥の窒素濃度を30 mg/L (ppm) に落とし、葉色に注意しながら生育をやや抑え気味に管理する。ただし、リン酸とカリは十分に与える必要があるため、含有比率の高い置き肥を施用する。さらに、夏場はカルシウム欠乏が出やすいため、カルシウム剤を2週間間隔で10月頃まで継続して散布する。</p> <p>また、11～12月に開花する花の花芽分化は7～8月に完了するが、マッチ棒の大きさ以上に発達した花芽では25℃以上の高温で伸長抑制や生育阻害が起こりやすくなる。晴天時には50～70%の遮光資材を展張し、換気を十分に行うことで施設内の昇温防止に努める。遮光による照度不足は葉や葉柄が軟弱になる原因であるため、鉢の間隔を広げ受光面積を確保する。</p>
(4) ハボタンの育苗	<p>年末出荷向けは7月中旬～8月上旬には種し、は種には200穴のセルトレイを用いる。は種が遅れると十分な葉数を確保できなくなるので注意する。</p> <p>25℃程度が発芽適温であるが、それ以上の高温では発芽が抑制されて不揃いになるため、黒寒冷紗などで遮光する。発芽後は、徒長防止のため遮光を中止する。</p> <p>また、高温期は胚軸が伸びやすく腰高の苗になりやすいので、子葉が展開した時期（は種後5日目頃）にわい化剤を処理する。</p> <p>ポット上げの時期は、は種後20～30日（本葉2、3枚頃）を目安とし、それまでは週1回程度液肥を施用する。</p>
(5) デルフィニウムのほ場準備	<p>6月で収穫を終えたデルフィニウムは、放置すると病害虫の温床となるため早期に除去する。その後のハウス内にはソルゴーをは種し、土壌改良を図る。除塩を兼ねた栽培目的でもあるため、は種後約50日でソルゴーを抜き取り、ほ場外に持ち出す。</p>

(作成 農林水産研究所)